第2群の座長をつとめて

田　村　幸　子
（金沢赤十字病院）

第2群の発表は4題であった。

第4席「抗結核剤による副作用症状緩和としてのヨモギ入浴の効果」（小山誠子氏発表）は，ケアの評価研究であった。ヨモギの薬理作用及び効果についてはすでにいくつかの報告があるところである。今回のヨモギ入浴の抗結核剤の副作用症状への効果の有無を論じるには入浴という方法の選択理由を明らかにし，濃度・入浴時間・入浴間隔・湯の温度などの比較検討を行い，どういう条件（方法）で行うヨモギ入浴は“効果あり”と実証する必要があった。また高齢者に多い老人性皮膚瘙痒症と抗結核剤の副作用による痒みとの区別をどうするかなど，あいまいさが残った。より確かなものを求めて更に研究を続けてもらいたい。

第5席「寝たきり患者の在宅ベンチレーターケアを担う介護者の疲労の推移」（田畑広美氏発表）は，人工呼吸器に依存して生命を維持している患者を在宅で看てゆく場合の介護者における疲労を仮説のもとにチェックし，疲労回復のためのリフレッシュ入院の有効性を証明しようとしたものである。この場合，在宅介護中の疲労の中で家事の負担からくる疲労と介護による疲労をどう評価するかや入院期間を2週間と限定した根拠を明らかにすることなど課題は残っている。また介護者のリフレッシュのための入院を，患者自身はどうとらえているかを明確にしておく必要があるとの指摘もあった。介護者の疲労回復のために（あるいは別の事由でも）患者にとって必要のない入院をしなくてもよいような手段が他にない以上，ある期間病院が預るという方法は，地域に根ざして医療を提供している病院の持つ1つの機能かとも考えさせられた。

第6席「自己末梢血幹細胞移植術を受ける患者の看護介入方法の検討」（浦美奈子氏発表）は，治療のため易感染状態にあり隔離されている患者の看護介入の方向性を，プライマリーナーシングを導入し考察した発表であった。感染予防－隔離－入院制限－セルフケアができること－の論理的構成のもとに，看護援助をセルフケア行動への働きかけにしぼり，プライマリーナース2名を決めている。セルフケア能力を判断し，ニードを把握し，少ない機会に的確に援助するにはプライマリーナーシングは有効であることを，セルフケアが実践できたか，感染を予防できたかの視点で評価している。このケースを通して“有効である”と結論づけているが，一例のみの結果で結論づけてよいものかどうか。今後の事例検討のつみ重ねが求められる。

第7席「患者側からみたモジュール型継続受持方式導入による効果」（浅川郁子氏発表）は，看護提供方式のちがいが患者側にどのように評価されているかを患者アンケートで調査し，チームナーシングとモジュール型における満足度を比較した発表であった。この場合とられたデーターの妥当性が研究として重要なのであるが，アンケート対象である入院経験者が，自分の体験の中で受けた看護のちがいを区別できていたかどうか。解答の中に，看護方式のちがいを“知らない”が半数以上いたことからも看護方式のちがいを実感しての解答か疑問が残るのである。看護方式についてはどこの施設でも関心のあるところかと思う。6席，7席の発表が再考の機会になればと願う。